



(坂之上正久・画)

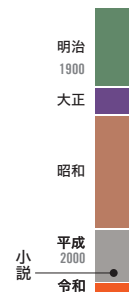
解釈の多様性

さまざまな読み方を考える

物語の展開に伴って疑問が深まっていく過程を読む  
 探究 作者自身のコメントから物語のはたらしきについて考える

予感  
 青山七恵

大意  
 旅行から帰ると家が消えていた。いつか何かが起こるといふ予感があったものの衝撃は大きく、「わたし」は災難が起こったときにはまず実家に電話しようと思っていたことを思い出す。電話はとられず、「わたし」は110番にかけ、ホテルに移動した。「わたし」は再び実家に電話をする。これまでに見舞われた災難について泣きながら訴えると、電話口の向こうの父と母と祖母は、自分の人生を生きている証拠だと返答した。



◎第一段(実家への最初の電話)

旅行を終えて帰ってくると、わたしの家は消えていた。

正確にはわたしがその三〇三号室を借りている賃貸マンションが消えていたのだけれども、持ち家でなくとも家は家、**唯一無二**のわたしの家だ。その家が消えてしまった。

いつか、これに似た何かが起こるといふ予感**は**あった。仕事から帰ってきたら家が燃

えていたり水浸しになっていたり空き巣と鉢合わせしたりすることも、ありえなくはない

と思っていた。なにしろ不注意な自分のことだ、今回の旅行でだって財布入りのバツ

グをまるごと置き引きされている。旅先での置き引き被害は三度目だから、もう驚くよ

うなことでもない……とはいえ家が消えたのはさすがにこたえた。気づいたときには道

ただ「ただで」つとないこと。  
 \* 互いに思いがけず出会うこと。

「〜ていた」という完了の文末表現を用いた効果的な書き出し。この一文によって、主人公が突如その中に投げ出された不条理とも言える状況を、読者もそのまま引き受けざるを得なくなる。

端に座り込んでぶるぶる震えていた。

震えながらわたしは、こういう大きな

災難が起こったときにはまず、実家に

電話しようと思っていたことを思い出

した。実家には父と母と父方のおばあ

ちゃんが残っている。携帯電話を取り

出して応答を待つあいだ、立ち上がった

て目の前の更地をよく見た。

家は消えたというより取り壊された

だけのようだった。黒っぽい土がし字

を逆さにしたマンションの形そのまま

になっていて、中央でこんもり小山

でないけれど、小山の手前には銀色の、

おそらくは蛇口が転がっていて、隣に

いつの、どのような内容の災難であれ、そのとき即座に連絡することが可能であり、また許されもする相手として、実家の家族が想定されている。

「家」が「消える」という認識は改められる。

\* 用語  
 唯一無二／鉢合わせ／こたえる

二つ並んでいる影は共用玄関に鉢植えで置かれていたパキラとアレカヤシらしい。ひよっとしてここは畑になるのだろうか？ 実際、東側の隣の敷地はすでに畑だった。夏にはナスだのトマトだのトウモロコシだの、色の濃い野菜がふんだんになっているのが三階の廊下からよく見えたものだ。でも今は、だらだらとしたつる状の植物だけが畑を覆っている。

「わたし」の奇妙な思考や感覚。

実家の電話は誰にもとられない。もしかして実家も畑になっているのかもしれない。目をつむって携帯電話に耳を澄ませてみるけれど、呼び出し音に畑の気配はどこにもない。気をとりなおして一一〇番にかけることにした。一一〇番には一昨年ひったくりに遭ったときにもかけたし、中学生のときにも公衆電話からかけたことがある。応答したのは女性だった。旅行から帰ってきたら家がなくなっていて困っている、訴えるところに住所を聞かれた。まともな扱いはされないだろうと覚悟していたのに、今から警察官を一人派遣してくれると言う。警察官は自転車で行ってきた。そして倒れるように地に足を着けたと思ったら、荷台の白い缶から出した何かと目の前の更地を熱心に見比べはじめた。盗み見るとそれは地図だった。それから警察官はわたしを交番まで連れていき、名前と年齢と住所と勤務先を紙に書かせ、最寄りのビジネスホテルまでの地図をくれた。「わたし」ではなく「警察官」が主語であり、「わたし」は一貫して受け身で、自分の意思ではないという気持ちを表すかのような書き方がなされている。

わたしは示されるがままに電車に乗って、四つ隣の駅前にあるそのホテルにチェックインした。

とんだ災難だったけど、旅行帰りだけあって洗面道具や着替えがひととおり揃っているのが不幸中の幸いだ。家などなくても、洗面道具と着替えさえあればどこでも暮らしていけるのかもしれない。でもすぐに、お金のことを思い出した。財布とは別にスーツケースに三万円を入れてあったから、その残りでとりあえず今晚の支払いはまかなえる。でも銀行の預金はどうやって引き出せばいい？ 通帳も印鑑も家と一緒に失くしてしまったのだから、窓口に行ってもすぐ複雑な手続きが必要だろう。その前に明日の出勤をどうしよう？ スーツケースに入っているのはTシャツや綿のワンピースばかりで会社に着ていけるような服はない。わたしは窓辺に立って、かつて家があったと思われ

◎第一段(実家へへの二度目の電話)

部屋の灯りを消したあと、もう一度実家に電話した。「もしもし？」

話器を取ったのは母だと思っただけれど、「どした？」と言ったのは父だった。「お父さん？」

「聞くとおばあちゃんだよ」と返ってきた。わたしは帰ってきたら家がなくなっていたことを話した。それだけではなく旅先でバッグを盗まれたこと、一昨年はひった



(PIXTA 提供)

① 畑の気配とはどのようなものか。



(PIXTA 提供)

通常は視覚や嗅覚などで捉えるはずの気配を聴覚で捉えようとしている。「わたし」の奇妙な思考や感覚。

「わたし」の年齢や性別、職業等を推測する手がかりとなる箇所。

個人の携帯電話ではなく実家の固定電話にかけている。「わたし」は特定の誰かに電話をかけたのではなく、実家に、三人の集合体としての家族に電話をかけているのである。



### 羅針盤

略。(指導書参照)

課題1 「わたし」の行動と気持ちの変化を、物語の展開に即して整理しよう。

🔗 読み解きツール② 構成・展開 446ページ

課題2 「わたし」はどのような人物として描かれているか。

「いつか、これに似た何かが起こるといふ予感があった。」(32・4)という表現や「わたし」の言動を手がかりに、まとめてみよう。

🔗 読み解きツール⑦ 人物造形 449ページ

課題3 「もう一度実家に電話した」(35・12)ときに、電話の相手の声が二転三転しているように「わたし」

が感じたのはなぜか、考えてみよう。

課題4 「贅沢な……証拠じゃないの。」(36・9)という言葉を「わたし」はどう受けとめたか。考えよう。



(本人提供)

青山七恵 あおやまななえ

一九八三(昭和五八)年。小説家。埼玉県生まれ。二〇〇七年に「ひとり日和」で芥川賞を受賞。「友達」や「家族」のような言葉では捉えきれない人と人の関係性を、淡く繊細な文体で描き出す。作品に「踊る星座」などがある。本文は『風』(二〇一四)による。(河出文庫)



『風』表紙

くりに遭ったこと、さらに過去にさかのぼって二度の置き引き、交通事故、数えきれない忘れものと失くしもの、それまでに起こったありとあらゆる不運についても話した。ときどき咳込みながら相槌を打つ電話口の向こうの声は、三人の誰でもないようで三人全員の声だった。

でも今度は家だよ、家がないんだよ。わたしは泣きながら言った。もういやんなっちゃった、どうしてわたしばかり、こんなにつぎつぎ災難に見舞われなくちゃいけないの？

好ましくない物や災難がある人に及ぶ。受け身の形で用いることが多い。

すると父と母とおばあちゃんは言った、  
贅沢なことを言うんじゃないよ、それはおまえがおまえの人生を生きている証拠じゃないの。

現実が夢か曖昧さを残す表現。

主題につながる言葉。発言主がどのような意図で言ったかではなく、「わたし」がそれをどのように受け止めたかを考えさせたい。

### 協働的な学びのために

「わたし」にとって「実家」はどのような存在なのだろうか。グループでお互いの考えを交流しよう。

### 探究——考えを深める

次のインタビュー「作家の読書道」をあわせて読んで、これまで読んできた物語や小説の中で、「物語の力」を感じた作品について文章にまとめよう。

### 探究教材 作家の読書道 (青山七恵)

青山七恵さんが読んできた本たち

いちばん古い読書の記憶を教えてください。  
小さい頃、絵本の「ノンタン」シリーズがすごく好きで

した。なかでも『ノントンのたんじょうび』っていうのが大好きで。表紙の裏にクッキーの作り方が書いてあるんですよ。それがすごくおいしそうだったのが、読書の最初の記憶です。

——家で本を読んで過ごすことも多かったですか。

そうですね。玄関入ってすぐに「物置」と呼ばれている、1・5畳くらいの部屋があって、小さな子供用の本棚が置かれていたので、そこでよく読んでいました。英語のちっちゃい絵本があって、当然字は読めませんが鳥が結婚してケーキを焼くような話があって。とにかくその絵が好きでよく見ていたような記憶があります。やっぱりクッキーとかケーキが出てくるものが好きでしたね。だから小さい頃の読書というと、図書館のような広々としたところで読んでいた記憶ではなく、狭くてちょっと薄暗い場所です。猫とかと同じで、狭くて暗いところが好きだったんでしょうね（笑）。

——小学校に上がると、また読書生活も変わりましたか。

教室のうしろに学級文庫があったのですが、落ち葉で

きた人間みたいなのが出てくる絵本がすごく気に入って、誰にも読まれないように学級文庫の奥に隠していた記憶があります。ちよつとも悲しいお話で、主人公の女の子と落ち葉人間が友達になるんですが、最後にはお別れするときが来るんです。

——そこから、だんだん文字の多い本も読むようになって……。

小学2年生の教科書に載っていた『そして、トンキーもしんだ』というお話は特によく覚えています。戦時中の上野動物園の話で、飼育している動物を殺さなくてはいけないくなるんですが、象のトンキーは大きいので毒が効かず、餓死させることになってしまふんです。このお話を忘れられないのは、授業中、生徒の机の周りを歩きながら朗読していた先生が、途中で泣き出しちゃったからなんです。

びつくりしました。大人が泣いているところを見るのはたぶん初めてだったので、「あ、先生がお話読んで泣いてる」って思ってた。「大人でもこうやって本を読んで泣いちゃうことがあるんだ」とショックを受けつつ、「先生は

この話を何回も読んでいるはずなのに、なんで泣いちゃうんだろう」と不思議にも思いました。トンキーのお話そのものよりも、先生の涙と、そのときの驚きをよく覚えていきます。

——めちゃくちゃ冷静な子どもですね。

今、大学で受け持っている授業のなかで小説を朗読する時間があるんですけど、やっぱり何回も読んできた小説でも、声というかたちで自分の身体を通った物語とは、黙読している時とは違う回路で交感している感じがするんです。涙を流すほどじゃないけれど、胸が詰まって読めなくなっちゃうことがよくあるんですよ。あの先生が涙したのも、そういうことだったのかもしれないんですが、とにかく本当に、子ども心に衝撃でした。「お話って大人の先生を泣かせちゃうくらいのもなんだ」という、物語の力と怖さを目の当たりにした感じがしました。

——中学生になってから読書生活は変わりましたか。

中学校の図書館で、吉本ばななさん（P427参照）の『アムリタ』を読んだとき、「そして、トンキーもしんだ」と

同じくらいの衝撃を受けました。小説というものを目の当たりにした驚きだったと思います。これはいままでも自分が読んでいたものとは何か違う、小説って、もしかしてこういうものかというのかな、って思ったんですね。

『アムリタ』では、誰も魔法を使わないし、木も虫も喋らないし、アルファベット順に人が死んだりもしません。そのかわりに、主人公の女性が頭を打って記憶をなくしたり、弟が急に超能力に目覚めたり、死んだ妹の恋人と仲良くなったりする。実際にはいろんなことは起こってはいませんが、それまで読んでいたものと比べると、この本では何も起こっていないように見えて、愕然としちゃったんです。でも、直感的に、これはこれまで好きで読んでいた別世界の話じゃない、これは自分にも何か関係のある話だ、というふうに思いました。そして読み進めていくうち、こういうものが「小説」と呼ばれるものなんじゃないかと感じ始めて、なんだか、「あれれっ」と思っちゃったんですよね。

（出典 『作家の読書道』二〇二〇年  
（本の雑誌社）  
（聞き手 滝井朝世）